

日本英語教育史学会 会報

303

2021 年 6 月 25 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第37回全国大会 (大阪大会) 報告

2021 (令和3) 年 5 月 15 日 (土)・16 日 (日), 第 37 回全国大会 (大阪大会) が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。初日は日野信行氏 (大阪大学大学院言語文化研究科教授) による『『国際英語』教育の研究における歴史的考察の意義』と題する講演, 及び 3 本の研究発表が行われました。第二日は 2 本の研究発表及び「英語教育史研究の諸問題」と題する参加型シンポジウムが行われ, 2 日間で 44 名の参加がありました。ご参加いただいた皆様, 関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。

研究発表タイトル・発表者一覧

発表 1: 戦前日本の英語教育における教科横断的要素 (CLIL) について

二五 義博 (海上保安大学校)

発表 2: 文部省主催中等英語教員講習の史的研究 (その 1)

孫工季也 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)

江利川 春雄 (和歌山大学名誉教授)

発表 3: 福島プランにおける Palmer の Oral Method の影響: 『信夫草』の磯尾哲夫の記述から

小林 大介 (静岡市立高等学校)

田邊 祐司 (専修大学)

発表 4: 村井知至・難波農夫雄『新式英語自修全書』に見る教育的まなざし

上野 舞斗 (四天王寺大学)

発表 5: 『英文法汎論』以前の日本の英文法書・英語教科書に見られる「2 重目的語」:

列記から分類・形式化まで

川嶋 正士 (日本大学)

<講演の感想>

◆日野先生のご講演は、学会側の趣旨を考慮に入れてくださり、3つの国際英語論の発展過程とそれぞれのモデルに関する批判を手際良くまとめられたばかりでなく、英語教育への示唆をも取り入れられたオールラウンドなものでした。ちょっとしたエピソード挿入もタイミング良く、盛り込まれ、あきの全くこない講演となりました。日野先生「ドストライク！」でした。深謝であります。

(UG)

◆国際英語をめぐるこれを歴史的に眺めるとどのように捉えられるかについてのお話を興味深く伺いました。何度か言及された斎藤秀三郎の『和英大辞典』(1928)に、英語は極めて論理的な言語であるのに、「何番目の」を表す言い方が無いのは英語の欠陥であるとし、ついでには **how manieth** という言い方をしてはどうかというような提案をしていることを思い出しました。このことを知ったのちにアメリカの古書店から届いた目録にこの **manieth** の語が用いられていて、注文のついでにこの斎藤のエピソードを紹介しておきましたが、店主からの返事にはそんな昔に日本人がそういう提案をしていることに驚いたと書き添えられておりました。また、**Kachru** の三重同心円説について、親藩・譜代・外様との分け方とパラレルに捉えられるとのお考えについても面白く思いました。

(Dragon)

◆日野信行先生のご講演は大変刺激的で「国際英語」教育について多くのことを学ばせていただき、英語教育史を学ぶ意義を再認識することができました。先生のご研究の原点が中学時代に抱いた疑問や高校時代の洞察にもあるということも感動的でした。ありがとうございました。(安部規子)

◆「国際英語」への反発はなかったのかが気になりました。例えば、フランス語推進派や、イギリスの保守的な知識人などがどのように反応したのかもっと知りたいと思いました。(広川由子)

◆時間の制約が惜しまれるくらい刺激的で充実したご講演に聞き入っていました。アメリカの伝統的な価値観として **unfair** と **a chip on the shoulder** の概念を挙げられていたのが印象的で、現在のアメリカのコロナ対策やイスラエルに対する対応もこの価値観に照らし合わせることで改めて気付かされることがあり、空間的な横軸だけではなく、時間的な縦軸で物事を捉えることの意義を再認識することができました。

(小林大介)

◆大変充実した内容で、多く学ばせていただきました。ご講演の構成、切り口が興味深く、とりわけ、「国際英語に関する言語態度の歴史的な変遷から国際英語の理念の本質を分析」での国際英語とナショナリズムの関係性については、さらに学びを追求したいと思いました。(Nina)

<発表1の感想>

◆二五先生のご発表は誠実なお人柄が伝わるものでした。**CLIL**の源流が日本にあったという意欲的な仮説ですが、論証するためには現在の**CLIL**の定義を綿密に行われた後に、明治期の「**CLIL**らしき取り組み」との比較作業という流れになるでしょうか。また、**CLIL**の本場の学会、海外での発表が期待されます。

(UG)

◆研究対象の教科書は明治41年発行とのことですので、この時点で(現在の)「小学校5・6年生向け」とはいえないのではないのでしょうか。この時期は義務教育年限が6年に延長になったとはいえ、まだ尋常小学校を中退する人も少なくなく、高等小学校そのものの性格をどのように捉えるかが重要だと思います。

(広川由子)

◆古い英語教科書に**CLIL**の発想を読み取ろうとするとご発表と理解しましたが、題材内容がいずれ

かの教科と関連するのは当然のことであって、果たしてそれが現在主張されている CLIL と呼ぶものかどうか疑問に思いました。英語の教科書において他教科の内容が扱われていても、授業では単語の発音練習、本文の音読、訳読というような形で展開していると、これは CLIL の名で呼ぶ教授法・指導法ではなくなりますので、例えば CLIL の形で展開された授業例——英語教科書で読んだレシピを基に調理実習でその料理を作ってみるとか——を発掘しないかぎり、what to teach の領域に属する教科書題材と、how to teach の領分である CLIL との整合性はとり難いのではないのでしょうか。

(Dragon)

<発表2の感想>

◆文部省夏季講習会の全貌を把握しようとするスコープの大きなご研究のいわば見取り図をお示しいただき、そのまとめが楽しみです。今では『官報』などもデジタルで容易に見られ、『英語青年』や「文部省年報」なども復刻されていますが、桜井役が『日本英語教育史稿』をまとめた際には文部省に席を置いていたからこそ公的資料が容易に利用できたというような事情を考えると、隔世の感を覚えます。研究計画の中には、正則英語学校の講習会などもいずれはと示されていましたが、この正則講習会は文部省講習会受講生をねらっての開催だったようで、それぞれがいかなる内容の講習を実施し、それに参加した教員たちがどのような感想を抱いたかなど、総合的・俯瞰的に——どこかで聞いた文句ですが——明らかにしていただいて、現今の学校現場でなかなか研修の機会も得られない先生方に、あるいは、行政サイドになにかご提言をいただければと願っております。

(Dragon)

◆現在の教員免許更新制を思い出しながら聞きました。講習の中身も面白そうですが、こうした講習がどのような機能を果たしたのかを知りたいと思いました。

(広川由子)

◆孫工さんと江利川先生の着眼点はさすがです。私自身、もっぱら英語音声関係で文部省主催中等英語教員講習の内容を適当に「つまみ喰い」して来ましたが、講習会に関する体系だった研究は誰も着手しておらず（そうですね?）、今後の進展がのぞまれます。一点、私が調べた講習会では結構、音声指導が多かったのですが、あのグラフではどこに入れられちゃったのでしょうか? (UG)

<発表3の感想>

◆質疑応答において発表題目と発表内容との乖離が指摘されていましたが、磯尾が『信夫草』にまとめているのは、校友会誌の性格上、福中生に対して英語学習の方法・心構えを説いたものでしょうから、例えば、2編の記事中、これこれの部分は教員向け報告書である The Fukushima Plan のこの箇所を、あるいは、パーマーの主張中のこの部分を、それぞれ生徒が英語を学ぶ場合に敷衍、適用したものである、といった具合に対照して示すことでクリアーできるのではないのでしょうか。

(Dragon)

◆何をもってオーラルメソッドとそうでないものを区別するのか、そのことを考える良い機会になったように思います。

(広川由子)

<発表4の感想>

◆村井知至・難波農夫雄による『新式英語自修全書』を取り上げてのご発表、興味深く伺いました。ただ、英語全般にわたっての自修を目的とする独学者対象のものとしては明治後期からそのタイトル中に、あるいはシリーズ名中に「自修」や「独修」、「独習」を含めるものが種々刊行されており、

国会図書館のデジタルコレクション中からも拾い出すことができます。それらはいずれも一定の「教育的まなざし」の下に著されているはずであり、その中においてこの村井・難波の全書6冊はいかなる特徴を有するのか、今回はいわば *intra-* の視点からの分析でしたが、これに *inter-* の観点からの分析をも交えて、この全書6冊を位置づけていただければと願っております。

(Dragon)

◆ご発表を聞く限り、大正時代の英語学習参考書には、明治期までのようないわゆる「盗用」がみられなくなり、教材としての質が向上したのだなと思いました。「わかりやすさ」を意識した編纂物で好評を博したのは「小野圭」の参考書だとも言われていますが、それ以前においても、さまざまな配慮が行われた教材が存在したこと示すよい資料であると感じました。(ポレポレ)

◆戦前日本における英語学習人口の広がりを感じました。学校の教育課程を見るだけでは、実態はつかめないと感じました。(広川由子)

<発表5の感想>

◆細江『英文法汎論』以前の二重目的語をめぐるいくつかの解釈を分析、ご紹介いただきましたが、うかつにも岡倉が間接目的語を「動詞 *showed, gave* 等に係る一種の修飾語なり」としていることは意識に上っておりませんでした。ただ、岡倉は「注意」として間接目的語・直接目的語を立てる文典もあるとしており、修飾語との立場をとる根拠はどこかで明らかにしていないのでしょうか。Globe にせよ、Outlines にせよ、教師用指導書が発行されていてこれを参照することができれば、或いはその辺りの説明があるやも知れませんが、指導書は刊行物扱いにならないのか、奥付すら無いものもあって、岡倉英文典についてはどうなのでしょう。(Dragon)

◆間接目的語が同時期の教科書にどのように表れていたのか、知りたいと思いました。(広川由子)

<シンポジウムの感想>

◆アーカイブについては、特にデジタル化が進んできて話題に上ることが多くなったような気がします。資料の保存と集約とは別して考えることが必要かと思えます。一ヶ所に集めれば、ある意味便利かもしれませんが、卵は一つのざるに盛るなことわざどおり、地震や津波、大洪水などの自然災害から完全に *free* な環境は得られませんし、また、それを管理する人間の、あるいは為政者の判断でいつ廃棄、改竄されるやも知れません。中国では秦の始皇帝が焚書坑儒を行っており、清朝乾隆帝の四庫全書にしても清朝に都合の悪い図書は対象外とされています。本日のシンポジウムでも最後のほうにわが学会のアーカイブをとの話がありましたが、その内容、その規模、そしてその設置場所について、短時日の議論ではまとまりきらないのではないかと懼れつつも、前向きにご検討いただければと願っております。(Dragon)

◆アーカイブという有意義なテーマでの企画でした。話題提供をされた馬本先生やご発言のあった先生方のお話から多くの示唆を受けました。また、江利川先生の教科書データベースの現在の状況や維持していくことの難しさを知ることができました。(安部規子)

◆多岐にわたり広がりのある会で、有意義な時間でした。今回のような「話題提供」の構成も勿論いいですが、パネリストがいて、各視点からの意見を求めるなどすると話題によりまとまりができるかもしれません。(Nina)

◆教育実践としてのアーカイブ、研究としてのアーカイブ、いずれにしてもその保存と共有、継承が重要である点は今回のシンポジウムを通して改めて感じたことです。市販の教材や刊行物もそう

ですが、特に学習の痕跡が残されたノートや、日記といった極めて個人的なものについても積極的に保存が行われれば良いな、と思っております。(ポレポレ)

<その他の感想>

◆オンライン開催による全国大会となり、一参加者として2日間パソコンの前に座っているだけでも相当に疲れましたので、大会のご準備、運営を担っていただいた榎本先生、馬本先生、河村先生にはお疲れになられたことと思います。御礼を申し上げるとともに、ご慰労を申し上げます。

研究発表においては、貴重な資料を画面を通してご提示いただき、また、質疑等に応じてその場で適宜取り出ししてお示しいただくことのできる利便を思いつつも、そのような資料を直に手に取って、好きな箇所を開いてみるという醍醐味が味わえませんので、やはりコロナ禍前の状態に一刻も早く復してほしいと願うところです。その収束後には或いはハイブリッド方式による全国大会、研究例会という形も検討されるかもしれませんが、個人的には、直に立ち話ができ、ほどよくアルコールが入ってという、温かみのある形に戻ってくれることを希っております。(Dragon)

◆Zoom であってもいつも通りのスムーズで和やかな進行の中、素晴らしいご講演やご発表を拝聴することができ、感謝しております。お若い先生方の発表からも学ぶ点が多かったです。チャットで発表資料を先にいただくことができたのも助かりました。大会実行委員長の榎本先生始め実行委員の先生方大変お世話になりました。(安部規子)

◆約10年ぶりに全国大会に出席、発表をさせていただきました。情報量や発表構成などの点で稚拙な部分も多々あったかと思いますが、今後研究を進めていく上で大変有意義なご意見を先生方からいただけて有り難く思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。(小林大介)

◆事務局のご苦労は大変なものと思存します。大会のご準備をしてくださった先生方にお礼申し上げます。(Nina)

◆いつも、皆様の御活躍を拝聴し、大変ありがたく存じます。一日目には、参加できずに大変失礼しました。私は、英語教育に携わった経歴が浅く、歴史の重要さの認識が足りませんでした。昨年からは、研究のために皆様方の多くの論文を拝見する機会があり、細かなところを緻密に調べていく大変さに胸を撃たれます。英語教育の問題は、明治以来、そして、世界で同じ課題を抱えているという思いがします。繰り返される問いに、答えはないようですが、英語早期教育への疑問は、これから応えられていくのでしょうか。江利川先生をはじめ、皆様の御健康と御検討をお祈り申し上げます。(SS)

◆このような学会に参加させて頂くのは初めてのことで、分からない事だらけでした。先生方の発表も、無知な自分は付いて行くのに必死でした。発表された先生方の独創的な発想や、斬新な意見から、英語を学ぶということは、ただ単に単語や文法を暗記するのでは無いと身にしみて感じました。また、プレゼンテーションもとてもレベルが高く、時間内に自分が伝えたいことをまとめる力の大切さを学ばせて頂きました。私も練習を重ね、先生方のような発表に近づけるように努力してまいります。今回の学会に参加させて頂いたことで、今まで知らなかった新たな英語の世界を覗く事が出来ました。今回学んだ経験を活かし、今後の自分に繋げたいと思います。お誘いいただきまして、有難うございました。(野崎航平)

◆今回の全国大会では、オンラインで学術懇親会が開かれました。対面の時のようにはいきませんが、非常に有意義な時間を過ごせたと感じております。個人的には、月例会にも同様の時間などを設けていただけたら、とても嬉しく思います。(ポレポレ)

第 37 回全国大会 (大阪大会) を終えて

大会実行委員長 榎本 剛士

昨年、中止を余儀なくされた第 36 回を引き継ぐ形で、第 37 回全国大会 (大阪大会) を開催し、無事に終えることができました。お忙しいなか記念講演を快くお引き受け下さった日野信行先生、ご参加頂いた皆様、そして、大会の企画・運営の様々な局面でお力添えを頂いた前役員の先生方と実行委員の先生方に心より御礼申し上げます。

例年に比べるとややコンパクトな感はありましたが、充実した内容の大会でした。日本の英語教育史における外部と内部の視点を「国際英語」の立場から融合させる日野先生のお話に、多くの参加者が感銘を受けたことと思います。また、日々のご研鑽の成果である研究発表は、いずれも新たな知見を着実に紡ぎ出す、興味深いものでした。さらに、本大会では「参加型シンポジウム」という新企画を実現することができました。馬本勉先生による話題提供に始まり、公文書から各学校における記録、ひいては指導案や授業実践に至るまで「アーカイブ」として残すことの重要性を共有しつつ、そのための方法が大きな課題となることが議論を通じて鮮明となりました。(個人的には、「1 回的なもの」「その場で消えていく即興的なもの」の意義をあらためて考えさせられる機会でもありました。)

第 37 回全国大会は、歴史を研究する学会が歴史的な事態に直面している状況下で行われたことも、ここにしっかりと記しておきたいと思えます。2020 年から続くコロナ禍は、生活のあらゆる場面に影響を及ぼし、これまでのやり方やこれからのあり方の再考を私たちに迫っています。本大会は初の「オンライン」開催でしたが、会員の皆様が全国に散らばっていることを考えれば、移動の必要がなく、経費も抑えられるオンライン開催は、極めて合理的です。また、それを可能にする Zoom などのツールも、運営・参加の両側面において新たな可能性をもたらすものであることは間違いないでしょう。

しかし、本学会のみならず、国内外の多くの学会のイベントがオンラインになる中で、知が「場所」で「感じる」ことにどれほど支えられていたか、思いを致さずにはいられません。学会という「ソサエティ」には、テクノロジーを積極的に活用しながらも、一緒だったものが切り離されていく趨勢に敏感であって欲しい。第 37 回全国大会は、このような願いを私の心に残していきました。

会長退任のご挨拶

江利川 春雄

このたび、2014 年より 7 年間に及ぶ日本英語教育史学会会長を退任いたしました。3 期 6 年に加え、新型コロナ禍による 2020 年度大会・総会の中止に伴い、緊急措置として 1 年間の留任となりました。学会運営にあたって苦楽を共にくださった役員各位には心から感謝申し上げます。また会員の皆さまのご協力なしには 7 年間の会長職を全うすることはできませんでした。ありがとうございました。

幸い、後任の会長には田邊祐司先生が就任されました。学術業績・社会貢献・人格のどれをとっても申し分のない上に、全国的な知名度によっても学会のリーダーとして最適な人です。ぜひ会員・役員一同で支えて参りましょう。

コロナ禍で再認識したことは、学会が **society** であることです。学術研究の場であることはもち

ろんですが、懇親・社交の場でもあることがいかに大切かを、失って初めて痛感しました。当面はオンラインであっても、懇親会を含む *society* としての機能を復活させませんか。この点は、会員数を増やす観点からも懸案事項かと思います。

もう一つの懸案事項は、日本学術会議の新規会員 6 人への政府による任命拒否問題です。本学会は日本学術会議協力学術研究団体であり、学問研究の自由への侵害を許さない見地から、2020 年 10 月に「日本学術会議新規会員任命拒否の撤回を求める声明」を发出了しました。全国で 1000 を超す学会・団体が抗議声明を発しているにも拘わらず、この問題は解決していません。継続的な対応が必要だと思ひます。

「緊急事態」という言葉が日常的に飛び交う日々の中で、これまで経験したことのない事態への柔軟かつ的確な対応力が求められる時代に入りました。社会が大きく変わろうとしています。学会運営においても、伝統を守りつつも固定観念を捨て、とりわけ若い世代の発想と感性を大切にすることがますます大切になることでしょう。新執行部を中心に、知恵を出し合ひましよう。

大学院生だった 1990 年に日本英語教育史学会に入会して以来、私の研究人生は常に本学会とともにありました。1993 年に理事、2000 年に副会長、2005 年に事務局長 (兼任)、2014 年に会長を拝命し、出来成訓先生、伊村元道先生、小篠敏明先生、竹中龍範先生の歴代会長をはじめ、会員諸氏との交流を通じて、本学会に育てて頂きました。私は 2021 年 3 月に和歌山大学を定年退職し、人生の一区切りをつけましたが、引き続き論文審査委員長・名誉会長として本学会のために働いて参りたいと思ひます。

7 年間の在任中、皆さまには大変お世話になりました。ありがとうございました。

ご挨拶と Redesign

田邊 祐司

5 月 15 日 (土) に開催された第 37 回全国大会 (大阪大会) 初日の会員総会において、江利川春雄会長の後任として本学会の会長に選出されました。歴代の会長とは学識、力量ともに大きな開きがあることを自覚しておりますが、ご信任をいただいた以上、会員の皆様のサポートのもと、学会の発展のために精一杯努力をする所存です。どうぞよろしくお願ひします。

選出後のご挨拶時にも申しましたが、あの時はなぜか *Don't reinvent the wheel.* という英語フレーズが頭に浮びました。大元の *to reinvent the wheel* は「(わかりきっていることに) 無駄に時間を費やす」という意味です。このフレーズ、通例は否定形で用いられ、車輪のようにはるか昔に発明され、今では人々の生活に根付き、当たり前になっているものを再びゼロから作り直すことの無駄に警鐘を鳴らす警句です。これに従いますと、私の役割は歴代の会長と会員の皆様がこれまで培って来られたものを継承し、その伝統、文化を基盤にしながら、本学会のさらなる発展を担う次世代に繋ぐことだと認識しています。

と申しましても、何もせず「座して待つ」というわけではありません。とりわけ注力すべきは会員数の減少、高齢化への対策です。本学会は学術団体としては「ぎりぎり」のライン (*borderline*) にあり、若いメンバーの獲得は“*society*”の浮沈に関わる大きな *issue* です。

従来からの全国大会、例会、紀要、会報などの諸活動で、会員の増加を期待するのはもはや限界かもしれません。Not reinventing the wheel. に沿いながらも、さらなるプロモーション策を講じることが皆さんから託された課題だと考えています。

さて、その具体的な方策ですが、現在、まだ「妄想」段階です。それを少しだけここで述べさせていただきますと、現在のホームページ発信に加え、SNS や YouTube など若き学者が自家薬籠中のものにしていくメディアを使ったビデオ・プレゼンから始められないかと考えております。ここでは「私の発見」「私のお宝本」「現在の英語教育への提言」など、賛同を得た会員に各々と英語教育史との関わりを語ってもらうことをイメージしています。

2つ目は、会員の研究からこぼれ落ちる現代の英語教育に役立つ知見をまとめ、単行本の形で出版するアイデアです。かつて『英語教育』(大修館書店)誌上で、本学会の有志による「日本の英語教育 200 年」(2011.4~2012.3)という連載を行いました。さらに江利川前会長のお声かけで「英語教育史入門講座」という試みを例会に盛り込んだ時期もありました。こうした地道な活動はやはり本学会の存在意義 (raison d'être) を世に示し続けるという意味において、絶やしてならないものです。英語教育史をやっているからこそ、英語教師、学習者へと伝えられる知見は数多くあるはずです。出版は性急に進めることはできませんが、じっくりと時間をかけながら、それでも任期中にはまとめてみたいと妄想を膨らませています。加えて、江利川前会長が先鞭をつけられた、絶版となった名著や入手困難な書籍の復刻作業もぜひ継続して行きたいプロモーション策のひとつです。

3つ目のアイデアは、大阪大会の参加型シンポジウムで議論された「アーカイブ化」事業です。これは年を追うごとに散逸、朽ちて行く「英語教育文化遺産」とも呼べる史料を集積・保全し、デジタル化する作業が中心になります。大阪大会でのシンポジウムの発案は馬本副会長でしたが、内容、方向性に手応えを感じた会員も多かったという印象を抱いています。

ただ、一口にアーカイブと言っても、書籍、雑誌類はもとより、指導教案や授業で配布されたプリント類、中間や期末テストの集積など、カバーすべき領域は膨大です。こちらは馬本副会長のリードにより、収集するものを分類し、やれる領域から少しずつ始めるという *down-to-earth* な形でのぞむことができればと思います。そうして集まったものをホームページや上述の SNS や YouTube と連動させ、スクリーン上で誰もが閲覧できる形になれば、潜在会員の獲得につながるのではと夢見ています。

以上、今のところどれも妄想段階で、企図していることを *think out loud* したに過ぎませんが、まずはできるところから取りかかり、三役会、理事会の賛同を得て、少しずつ具現化したいと思えます。いずれ会員の皆様のご協力をお願いすることになろうかと存じます。

末筆になりますが、こうした若い世代へのプロモーション策として思い起こすのが、各地の図書館、博物館、美術館、さらには動物園、水族館などでの取り組みです。もう数十年以上も前からでしょうか、こうした施設では *reinventing the wheel* という方針は取らず、今、そこにある *resources* を最大限活用しながら、様々な角度からの工夫 (そして多くの労力も) を加えることで次世代へのアプローチをはかっています。ちなみに、新たな形でのプロモーションに従事する職員も「学芸員」という名称ではなく、*Communicator* という呼称が与えられ (例えば、科学博物館の *Science Communicator*)、難しいものをわかりやすく、理解してもらえることに力点を置くこうした取り組みは、我々の取るべき方向性にも大きな示唆を与えてくれています。

本学会もこの国で営まれた英語教育での歴史遺産を整理し、それらを自分たちだけの成果にとどめるだけではなく、以上述べたようなプロモーション策を通して、それぞれが *ELT History in*

Japan の Communicator となり、若い人々へと訴求行けないかと考える次第です。その際のスタンスは、もちろん Don't reinvent the wheel, just redesign it! であります。

》 事務局より

》 2021年度 会員総会 報告

2021年度の会員総会は、5月15日の午後1時よりZoomを用いてオンラインで開催されました。副会長の馬本勉氏（県立広島大学）の司会で始まった会は、最初に水島孝司氏（南九州短期大学）を議長に選出し、以下の議事を進行しました。

○ 活動報告・会計報告

活動報告・会計報告の内容は別掲の通りです。総会では、事務局長の河村和也（県立広島大学）による両報告に続き、安部規子氏（久留米工業高等専門学校）より会計監査報告を受け、2020年度の会計報告については承認されました。

○ 役員選出

任期満了にともなう会長の選出については、締め切りまでに以下の立候補のあったことが、選挙管理を担当した事務局より報告されました。

会長 田邊 祐司 氏（専修大学）

総会では、田邊氏を新会長として選出。田邊会長からは新役員の体制について説明がなされ、副会長・事務局長・理事・評議員の人事について承認しました。なお、新たな役員体制は別掲の通りです。

2020年度活動報告 -----

1. 新型コロナウイルスの感染拡大への対応

1-1. 以下の全国大会・研究例会については開催を見合わせた。

- ・ 第277回研究例会（2020年3月21日／京都）
- ・ 第36回全国大会（2020年5月16日・17日／大阪）
- ・ 第278回研究例会（2020年7月）

1-2. 2020年6月28日、「コロナ禍のもとでの学会運営について」で以下について発表した。

- ・ オンラインによる例会の開催
- ・ 役員任期の延長

1-3. 以下の研究例会についてはオンラインで開催した。

- ・ 第279回研究例会（2020年9月19日）
- ・ 第280回研究例会（2020年11月21日）
- ・ 第281回研究例会（2021年1月9日）
- ・ 第282回研究例会（2021年3月20日）

2. 学会誌について

2020年5月、学会誌『日本英語教育史研究』第35号を刊行し、前年度までの会費を納入済みの会員に送付した。

3. 会員数について

2021年4月29日、2021年度名簿原票を104人に発送した。返送・返信の締め切りを待ち、今年度の会員数を確定する。

4. その他

2020年10月11日、「日本学術会議新規会員任命拒否の撤回を求める声明」を理事会の承認を得て会長名で発表した。

2020年度会計報告 -----

2020 (令和2) 年度 日本英語教育史学会収支決算報告

2020 (令和2) 年4月1日 ~ 2021 (令和3) 年3月31日

収入の部		支出の部	
繰越金	1,322,362	月報関係費	36,694
学会費	487,000	事務活動費	37,224
紀要代金	11,000	大会補助費	0
広告代金	0	紀要経費	301,756
雑収入	0	雑費	880
寄付	0	支出合計	376,554
郵便局利子	1		
銀行利子	0		
収入合計	1,820,363	繰越金	1,443,809

以上相違ありません。

2021年5月2日

事務局会計 河村 和也 印
 会計監査 平賀 優子 印
 同 安部 規子 印

- ◎ 新型コロナウイルスの感染拡大にともない活動が制限されたことにより、支出が大幅に減少している。
- ◎ 会費の納入状況は例年に比して良好である。原因は不明だが、他の学協会においても同様の状況が報告されている。

≫ 2020年度第3回理事会報告

2021年度全国大会・会員総会の開催に先立ち、2020年度の第3回理事会が以下の通り開催されました。

日 時：2021年5月15日（土）11:00～11:30

方 式：Zoomを用いたオンライン会議

議 事：

- ・会員総会の進行次第について
- ・江利川会長退任あいさつ
- ・その他

≫ 2021年度第1回理事会報告

会員総会で新会長が選出されたことを受け、大会第2日の開会前に2021年度の第1回理事会が以下の通り開催されました。

日 時：2021年5月16日（日）12:00～12:30

方 式：Zoomを用いたオンライン会議

議 事：

1. 論文審査委員長ならびに論文審査委員の委嘱について、会長提案を承認しました。
2. 紀要編集委員長ならびに紀要編集委員の委嘱について、会長提案を承認しました
3. 顧問および名誉会長の委嘱について、会長提案を承認しました。
4. 副会長・理事の職務分担について検討の上、確認しました。
5. 事務局長から幹事の委嘱について報告を受けました。
6. 今年度の活動方針等について意見を交換しました。

≫ 日本英語教育史学会賞・日本英語教育史学会著作賞について

今年度の日本英語教育史学会賞・日本英語教育史学会著作賞については、受賞に該当する方はいらっしゃいませんでした。

≫ 日本英語教育史学会大会発表賞について

第 37 回全国大会における大会発表賞は以下の研究発表に贈られました。

村井知至・難波農夫雄『新式英語自修全書』に見る教育的まなざし
上野 舞斗 氏（四天王寺大学）

2021～2022年度 日本英語教育史学会役員

会長	田邊 祐司		
副会長	馬本 勉	久保野雅史	
理事	上野 舞斗	榎本 剛士	河村 和也
	藤本 文昭	若有 保彦	拝田 清

事務局長	河村 和也		
幹事	小林 大介	惟任 泰裕	孫工 季也

評議員	今野 鉄男	島岡 丘	西 忠温	茂住 實男
顧問	小篠 敏明	竹中 龍範		
名誉会長	江利川春雄			

論文審査委員長	江利川春雄		
紀要編集委員	藤本 文昭 (委員長)		
	川嶋 正士	惟任 泰裕	

会計監査	安部 規子	平賀 優子
------	-------	-------

)) 学会誌『日本英語教育史研究』第36号の送付について

新しい学会誌を5月22日に発送いたしました。会費納入をお願いする文書（「紀要の送付と年会費の納入について」）を同封いたしましたところ、すでに30名もの方にご対応いただいております。この場をお借りして、ご協力に感謝申し上げます。

発送日までに今年度分をお納めくださったみなさまには、納入日を記した文書（「会費紀要の送付について」）を同封いたしましたので、どうぞご確認ください。

1年もしくは2年分の会費が未納の方には、学会誌はお送りせず「会員継続のご案内」のみをお送りしております。ご確認のうえ、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

会費納入に期限は設けておりませんが、事務作業の都合上、7月末をめどとしていただければ幸いに存じます。

)) 年会費の納入について

年会費は以下の通りです。今一度ご確認くださいませようお願いいたします。なお、学生会員は初年度の会費が免除されます。

年 会 費	一般：5,000円 / 学生：3,000円 (大学院生を含む)
-------	---------------------------------

年会費は以下の口座にご送金ください。口座名義は「日本英語教育史学会」です。恐れ入りますが、手数料はご負担くださいますようお願いいたします。

- (1) ① 郵便局で払込取扱票をご利用の場合
 ② ゆうちょ銀行の総合口座 (旧ばるる) よりご送金の場合
 → ゆうちょ銀行 [振替口座] 00150-3-132873
- (2) ゆうちょ銀行を除く金融機関の口座よりご送金の場合
 → ゆうちょ銀行 〇一九 (ゼロイチキユウ) 店 [当座口座] 0132873

上に掲げた 2 つの口座は同一のものです。ゆうちょ銀行の「振替口座」は、ゆうちょ銀行以外の金融機関から送金する場合には「当座口座」の扱いとなり、支店名や口座番号が他の金融機関の形式に合わせたものとなります。

近年、払込取扱票によらずご送金くださる方が増えておりますので、これを同封するのを取り止めております。払込取扱票をご利用の場合、お手数ですが郵便局の窓口で「0」から始まる口座への送金とお伝えのうえお受け取りください。

『日本英語教育史研究』第 37 号 投稿論文の募集

2022 年 5 月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第 37 号への投稿論文を募集します。投稿締切は 9 月 30 日 (木) 23:59 JST です。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先 (紀要編集委員会) kiyo@hiset.jp

連載：日本英語教育史学会「会報」300 号の歩み(3)

会報が月報だった頃：EDITOR'S BOX から

馬本 勉

私が担当した号は、「月報」と呼んでいた頃の 179 号 (2004 年 4 月)、185 号 (2004 年 11 月) ~240 号 (2010 年 6 月)、名前が「会報」と変わってからの 241 号 (2010 年 8 月) ~256 号 (2013 年 4 月) です。8 年余りにわたり、73 の号を編集した日々が随分遠い昔のように感じられます。

2004 年 3 月、当時の月例会が初めて広島で行われました。その様子を伝える号は広島で編集をと任されたのが最初です。月報の編集後記にあたる **EDITOR'S BOX** の名は前任者から引き継ぎ、そのときどきの思いを綴りました。最初の号は、「初の広島例会、北は東北、南は九州から、多くの会員や一般参加の皆様がお集まりくださり、盛会裏に終えることができました」という言葉で始めています。

2004 年度は会長が交代し、伊村元道先生から小篠敏明先生へ。新体制の役割分担が進み、11 月の 185 号から正式に「月報編集部」を名乗りました。この号の末尾は「月報編集部が広島に移りました。皆様に愛される月報であり続けたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。(HB)」と締めくくっています。179 号では「馬」としていた筆名は、185 号以降は「HB」です。これが Horse Book と気づいた方も多いたと思いますが、単純すぎるのでどこにも書かずじまいでした。

翌年の 193 号 (2005 年 8 月) の **EDITOR'S BOX** は「今回の月報は悲しいお知らせの号となりました」で始まります。6 月末にお亡くなりになった伊藤裕道先生の追悼号でした。

EDITOR'S BOX ... 伊藤先生とは6月例会でお会いし、再会を期す固い握手を交わしたばかりでした。その後も病床からお手紙やお葉書を頂戴しました。... 学会を愛する気持ちと、私たち若手研究者への思い遣りに溢れるお言葉がたくさん綴られていました。「まだまだ言いたいことはたくさんあるんだ」という先生の静かな情熱が伝わってくるようでした。▼伊藤さん、僕にもまだまだ言いたいことはたくさんあったのですよ。こうやって僕がこの学会で研究を続けてこられたのは、伊藤さん、あなたのお陰です。... 6月例会での伊藤さんのご発表を伝えた前号を出したときは、「涙が出るほど嬉しかった」と喜んでくださいましたね。7月半ばに頂いた葉書の末尾には「同志へ！」と書いてくださいました。そのお礼もまだでした。これまで本当にお世話になって、その感謝の気持ちをきちんとお伝える前に、伊藤さんは旅立っていられました。▼伊藤さんが命を懸けて取り組まれたお仕事の、ほんの僅かも担えませんが、僕はこれからもこの学会で、伊藤さんのお陰でライフワークにしようと思った英語教育史の研究を続けていきたいと思えます。どうか安らかに眠ってください。(HB)

220号(2008年6月)を「記念号」と呼びました。理由は「新しい体制がスタートしたことをお伝えする今号は切りの良い号数であったこと」「個人的に私は2が好きなので」と綴っています。この年はフェートン号100年に当り、全国大会は日本英学史学会と合同で秋に開催するため、5月は例会と総会を組み合わせ実施しました。会長は小篠敏明先生から竹中龍範先生へ。220号には「若手エッセイ」(榎本剛士氏)、「英語教育史フォルダ」という新企画が登場します。全12ページ。この号に限り全会員140名余りに郵送したため、印刷・発送に数日間を費やしました。その様子を綴ったブログ記事です。

【英学徒の隠れ家日記(2008.6.3.)「ゴールドフィンガーを支えるオロナイン」】

月に一度、右中指の腹をテカテカさせながら、紙を折る。今回はいつもの5倍の枚数。さすがのゴールドフィンガーもお疲れの様子。▼写真のオロナインは指に塗るためではない。折り目の仕上げに、折った紙10部程度をまとめて圧縮する。そのときにオロナインの容器(陶器か?)の曲面を押し付けて滑らせる。▼単1の乾電池がいいよ、と教えてくれた人があるが、僕はなぜかオロナインが手に馴染む。▼オロナインの容器で二つ折を終え、今度はそれを封入のために三つ折。ふたたびゴールドフィンガーの出番だ。ここから先は、オロナインによる押さえは無し。ひたすら折って、封筒に入れ、封をする。▼ふと、憑かれたように没頭している自分に気付く。さすがに疲れた。金、土、日、月と、かかりっきりだったな、と思いながら、ものすごく不安になる。▼かかりつきりになれなくなったら、どうしよう?



231号(2009年6月)の**EDITOR'S BOX**は、Michael Jacksonの訃報に触れたことで、翌年の『英語教育』増刊号(2010年10月)「英語教育日誌」(p.71)に伊村元道先生が引用してくださいました。今、これを書きながら3曲を聞き返しています。

EDITOR'S BOX ... かつて「We Are the World」のDVDを手にしたとき、「この歌を英語のまま味わえることだけでも、英語を学んだ価値があるのでは」というようなことをメモに記した。学生時代に友人宅で初めて聴いたときは、大きなサイズのシングルレコードだったが、数年前にDVDを求め、何度も視聴した。この歌の中心にはMichael Jacksonがいる。これまで、どれだけの英語教科書がこ

の歌詞を掲載しただろうか。中学や高校の英語の授業で出会ったという大学生も数多い。... ▼授業で洋楽を紹介することも多いが、取り上げたことのあるマイケルの曲は3つ。先の“We Are the World”と、“Heal the World”，そして“**You Are Not Alone**” ▼今週の授業で久しぶりに紹介しようと思い立ち、CD や DVD を引っ張り出してみた。自分の世界に引き込んで歌詞の解釈を試みながら、繰り返し聴く。自分ではない誰かの支えになろうとする歌の言葉は、心に響くが、ときに重い。ただ、その歌詞と向き合うとき、英語の学習を超えた何かを掴むことができるように思う。

2010年6月に「月報」は最終号(240号)を迎えます。思えば私の40代前半は月報とともにありました。青春の思い出にひたりながら、これからの「会報」にエールを送りたいと思います。

EDITOR'S BOX これまで、月報は年間10号のペースで発行してきました。例会と全国大会の開催されない月が年に2回あるため、ときに一月以上の間隔が空くことはありましたが、やはり「月報」という名がふさわしい発行サイクルであったと思います。... これからは研究例会が隔月開催となり、それに合わせて「月報」も2ヶ月に一度、会員の皆様にお届けすることになります。次号より、名称も「月報」から「会報」へと変更します。▼これを機に、紙版の発送担当もバトンタッチすることになりました。紙と封筒と宛名ラベルを揃え、刷ったり折ったり貼ったりする作業は、私にとって今回が最後となります。月報担当を仰せつかった頃に比べると、紙版をお送りする先は半数以下に減りましたが、皆様のお顔を思い浮かべながら月報を折る作業は、月に一度の大切な時間でした。深夜の研究室で手を動かしながら、研究や会務についての着想を得たこともあります。ときに晴れない心をリセットしてくれたのも、この作業に没頭するひとときでした。

>> 新入会員

- ◆ 前田 哲男 (まえだ てつお) 神戸市 関西国際大学

>> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第283回研究例会 2021年7月17日(土) オンラインで開催予定
- ◆ 第284回研究例会 2021年9月18日(土) 未定
- ◆ 第285回研究例会 2021年11月20日(土) 未定
- ◆ 第286回研究例会 2022年1月8日(土) 未定
- ◆ 第287回研究例会 2022年3月19日(土) 未定

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1)発表希望月、(2)タイトル、(3)発表概要(100~200字程度)、(4)使用予定機器、以上の4点を明記の上、発表希望月の3ヶ月前の10日(11月発表希望であれば8月10日)までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 283 回 研究例会

日 時： 2021 年 7 月 17 日 (土) 14:00～17:00
オンライン開催

研究発表

占領期におけるアメリカ対日英語教育政策の形成過程

広川 由子 氏 (愛知江南短期大学)

【概要】本発表は、発表者の博士論文 (2020 年 9 月 28 日) 「米国対日英語教育構想と戦後日本の英語教育改革—新制中学校における外国語科の成立を中心に—」の成果に、新たに発見したアメリカ国務省の史料を加え、占領初期におけるアメリカ対日英語教育政策の形成過程を再検討するものである。本発表では、占領初期のアメリカ国務省が、日本人にどのような英語を学ばせようとしたかについて、新史料を公開しながら説明する。

共編著書を語る

「今」から見据える日本の英語教育の過去と未来：

鳥飼玖美子・鈴木希明・綾部保志・榎本剛士編著 『よくわかる英語教育学』を素材に

榎本 剛士 氏 (大阪大学)

綾部 保志 氏 (立教池袋中学校・高等学校)

【概要】『よくわかる英語教育学』(2021 年, ミネルヴァ書房) は, 教職課程を履修する学部生, すなわち, 未来の英語教員を主要な読者として想定し, 彼/女らが「主体的な英語教育者」となっていくための学びに貢献することを願って編まれた教科書である。本発表では, 冒頭でまず, 本書の構成とそれを根底で支える批判的視座について, 簡潔に述べる。そして, 榎本, 綾部がそれぞれの視点から, 本書を世に問うことが可能となった「今」を基点として, 日本の英語教育 (学) の過去, および, これからを見据えることを試みる。本書を素材として日本の英語教育の時間軸を想像したとき, どのような展望が拓けてくるか, 参加者とともに議論したい。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 新体制になって初めて発行する会報ということで, これを機に 2 つ変更を行いました。一つは感想の 2 段組を廃止したことです。私が編集を担当するようになって 8 年が過ぎましたが, これまでずっと段組の扱いに苦勞してきました。今回思い切ってこちらを変更しましたが, 今までどれだけの時間を段組に費やしていたのかを考えると, 「先輩のアドバイスにもっと早く耳を傾けるべきだった」と後悔しています。/もう一つの変更は題字の変更です。特殊な字体ではないのですが, これだけでも会報の雰囲気が変わった印象を個人的には受けました。文字の力について考えるきっかけになりました。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)